

[表2] 以下の資料は、表1の総括表の論拠を示すものである。

古代オリエント関係

- ① P.R.S.Moorey, Ancient Mesopotamian Materials and Industries, p.237
- ② フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.83
- ③ フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.83、p.87
- ④ フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.250
- ⑤ Eschnunna法典(BC1920頃)―出典Erste europäische Internetzeitschrift für Rechtsgeschichte(法制史についての欧州最初のインターネットサイト)―大麦1ゲル(ケル)300リットル(実際は120リットル)が銀1シェクル(8.4gr)、大麦/銀=12,000 粗銅1500grが銀1シェクル(8.4gr)
- ⑥ ウルク王シ・ガシトの公定物価(BC1870頃)―下中弘編『西洋史料集成』平凡社p.27―銀1シクル(8.3gr)当量として、穀物3ゲル(360リットル)、青銅10ナ(5kg)などをあげている。
- ⑦ イン・ラル期のヌ・アタト(BC1860)―大貫良夫他『世界の歴史1』p.214―銀1シクルが大麦2ゲル(240リットル)
- ⑧ ホルスト・クレンゲル『古代オリエント商人の世界』山川出版社(1983) p.146～153 銀1シェクルが錫13～13.25シェクル
- ⑨ フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.250、p.480
- ⑩ フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.247
- ⑪ フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.363
- ⑫ フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.363
- ⑬ フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.247
- ⑭ ホルスト・クレンゲル『古代オリエント商人の世界』山川出版社(1983) p.199～200 大麦160kgが金1シェクル(8.4gr)
- ⑮ 『世界史史料1・古代オリエントと地中海世界』p.45
- ⑯ フォーブス『古代の技術史』上・金属、p.480
- ⑰ P.R.S.Moorey, Ancient Mesopotamian Materials and Industries, p.299

古代オリエントの物価(エシュナ法典、ウルク王シ・ガシトの公定物価)をローマのデ・イオクレテ・イヌス物価令と比較すると次表のように、銅、羊毛、油、穀類ではほぼ比例関係が成立している。この結果から見ると、BC19～20世紀のメソポタミアにおける銀価格はローマ期の6倍ほどになっている。表1の総括表の金銀比価(8程度)よりもエジプトにおける比価2に近かったのではないかと考える。あるいはBC20世紀頃の銀にはエレクトラム(自然の金銀合金)が含まれていたかも知れない。

地域と年代	金	銀	銅	羊毛	油	穀物
BC1920年頃 エシュナ法典 (銀1シクル当量)	金銀比価2として4.2gr	8.3gr	1.5kg	3.0kg	ゴマ油 12リットル	大麦 120リットル
BC1870年頃 ウルク王シ・ガシト (銀1シクル当量)	金銀比価2として4.2gr	8.3gr	5.0kg	6.0kg	植物油 27リットル	大麦 360リットル
AD301年頃 デ・イオクレテ・イヌス勅令 (1000デナリウス当量)	5.5gr	55gr	5.5kg	4.3kg	オリーブ油 14リットル	小麦 120リットル

古代ギリシャ、古代中国から現代までの総括表

地域と年代	米or小麦	金	銀	銅(熟銅)	鉄(半製品)	錫	鉛
ギリシャ(BC480)	0.13トラーマ/kg ④	2.8トラーマ/gr	0.23トラーマ/gr				
ギリシャ(BC3-4C)	0.12トラーマ/l ④	2.8トラーマ/gr	0.23トラーマ/gr				
ローマ	(前73頃)	0.12テナリウス/kg①	3.0テナリウス/gr ①	0.26テナリウス/gr ①	銅/銀=1000 ①		
	(79頃)	0.12テナリウス/kg②	3.4テナリウス/gr ②	0.29テナリウス/gr ②	銅/銀=1000 ②		
	(301頃)	10テナリウス/kg ③	7.2万テナリウス/ポント 220テナリウス/gr ③	6000テナリウス/ポント 18.5テナリウス/gr ③	60テナリウス/ポント 185テナリウス/kg ③		
ササン朝(9-10C)	1トラーマ/8kabīz⑤		0.26トラーマ/gr				

エジプト(11C)	デナール/100kg	4.2gr/デナール						
中国	前漢	100銭/斛(15kg) 7銭/kg ①	1万銭/斤(250gr) 40銭/gr ②	1000銭/8両(125gr) 8銭/gr ②	1580銭/鈞(7.5kg) 210銭/kg ①	1000銭/石(30kg) 33銭/kg ①		
	後漢	山田勝芳『貨幣の中国古代史』p.210の金銀銅比価より						
	唐 (830頃)	80銭/斗(5kg) 16銭/kg ③	6-8千銭/両(40gr) 145~200銭/gr ④⑤		750銭/貫(4kg) 190銭/kg ⑥	7世紀初 鉄/米比価=5 ⑦		
	北宋 (1070頃)	50銭/斗(5kg) 10銭/kg ⑧	800銭/錢(4.0gr) 200銭/gr ⑧	1000銭/両(40gr) 25銭/gr ⑧	100銭/斤(0.64kg) 156銭/kg ⑧	20銭/斤(0.64kg) 30銭/kg ⑧		
	南宋 (1200頃)	250銭/斗(5kg) 50銭/kg ⑧	3000銭/錢(4.0gr) 750銭/gr ⑧	3000銭/両(40gr) 75銭/gr ⑧	480銭/斤(0.64kg) 750銭/kg ⑧			
日本	奈良時代 (760頃)	540銭/石(60kg) 9銭/kg ①	900銭/両(12.5gr) 72銭/gr ②	600銭/両(37.5gr) 16銭/gr ③	149銭/斤(0.60kg) 248銭/kg ④	58銭/kg ⑤ 800銭/kg ④		
	平安時代 (延喜式)	22束/石(60kg) 8銭/kg ⑥	6丁/両(12.5gr) 72銭/gr ⑥	1丁/分(10gr) 15銭/gr ⑥	5束/斤(0.60kg) 188銭/kg ⑥	1.5束/斤(0.60kg) 56銭/kg ⑥		
	平安中期 (1085頃)	10疋/石(60kg) 16.6銭/kg ⑰	25疋/両(12.5gr) 200銭/gr ⑰	5疋/両(12.5gr) 40銭/gr ⑰	1.6-2疋/斤(0.60kg) 300銭/kg ⑰	2疋/挺(2.0kg) 100銭/kg ⑰	8疋/斤(0.60kg) 1350銭/kg ⑰	
	平安末期 (1152頃)	10疋/石(60kg) 16.6銭/kg ⑦	20疋/両(12.5gr) 160銭/gr ⑦	12疋/両(37.5gr) 32銭/gr ⑦	8疋/斤(0.60kg) 1330銭/kg ⑦	2.5疋/挺(2.0kg) 125銭/kg ⑦		
	鎌倉時代 (1298頃)	105疋/石(60kg) 17銭/kg ⑧	300疋/両(12.5gr) 240銭/gr ⑧	100疋/両(15gr) 67銭/gr ⑧	56疋/斤(0.60kg) 900銭/kg ⑧	100疋/束(9kg) 110銭/kg ⑧		
	近 (朝鮮世宗 1436年)							
	室町時代 (1450頃)	1300銭/石(130kg) 10銭/kg ⑨	3000銭/両(15gr) 200銭/gr ⑨	550銭/両(15gr) 37銭/gr ⑨	1万銭/駄(113kg) 90銭/kg ⑨			
	室町時代 (1580頃)	1000銭/石(130kg) 8銭/kg ⑨	1500銭/両(15gr) 100銭/gr ⑨	150銭/両(15gr) 10銭/gr ⑨				
	江戸時代 (1616頃)	20匁/石(150kg) 0.13匁/kg ⑱	50匁/両(15gr) 3.3匁/gr ⑲	50匁(150gr) 0.33匁/gr ⑲	100匁/100斤(60kg) 1.33匁/kg ⑲	55匁/100斤(60kg) 0.91匁/kg ⑲	60匁/100斤(60kg) 1匁/kg ⑲	
	江戸時代 (1680頃)	3500銭/石(150kg) 23銭/kg ⑩	4000銭/両(15gr) 267銭/gr ⑩	4千銭/60匁(180gr) 22銭/gr ⑩	150匁/100斤(60kg) 140銭/kg ⑫	35匁/10貫(37.5kg) 58銭/kg ⑬		
	江戸時代 (1714頃)	1.80両/石(150kg) 36銭/kg ⑳	3060銭/両(7.8gr) 390銭/gr	3060銭/75匁(100gr) 31銭/gr	1.7両/100斤(60kg) 87銭/kg	8.2両/100貫(375kg) 67銭/kg ㉑	7.1両/100斤(60kg) 360銭/kg ㉑	2.05両/100斤(60kg) 104銭/kg ㉑
	江戸時代 (1736頃)	39.1匁/石(150kg) 24銭/kg ㉑	4800銭/両(15gr) 320銭/gr	4800銭/52匁(174gr) 28銭/gr	115匁/100斤(60kg) 180銭/kg ㉑	46.6匁/100斤 72銭/kg ㉑		
	江戸時代 (1770頃)	5300銭/石(150kg) 35銭/kg ⑪	5000銭/両(8.6gr) 600銭/gr ⑪	5千銭/60匁(100gr) 50銭/gr ⑪	223匁/100斤(60kg) 310銭/kg ⑭	40匁/10貫(37.5kg) 78銭/kg ⑮		
	江戸時代 (1830頃)	6000銭/石(150kg) 40銭/kg ⑪	6000銭/両(7.4gr) 800銭/kg ⑪	6千銭/60匁(74gr) 80銭/gr ⑪	320匁/100斤(60kg) 567銭/kg ⑯	62匁/24貫(90kg) 73銭/kg ⑯		
清末 (1840頃)	銀2.3両/石(86kg) 銀1gr/kg ㉒	この頃金銀比価は15と見る				3 \$ /picul(61kg) 銀1.2gr/kg ㉒		
日本 現	(1890頃)	4.7銭/kg	68銭/gr	4銭/gr	28銭/kg	6.3銭/kg		
	(1925頃)	27銭/kg	140銭/gr	5.4銭/gr	80銭/kg	10銭/kg		
	(1960頃)	76円/kg	570円/gr	11円/gr	288円/kg	36円/kg	860円/kg 100円/kg	
	(1980頃)	330円/kg	4500円/gr	170円/gr	440円/kg		4000円/kg 190円/kg	

代	(1998頃)	330円/kg	1300円/gr	23円/gr	230円/kg	40円/kg	900円/kg	110円/kg
	(2007頃)	250円/kg	2650円/gr	54円/gr	960円/kg		1900円/kg	340円/kg
欧州	英国関係 文献①②③を総合的に整理して別表3にまとめてある。							
	仏 1516頃	25 リーブル/ton ④	630リーブル/kg ④	53リーブル/kg ④				
	仏 1610頃	83 リーブル/ton ④	1030リーブル/kg ④	87リーブル/kg ④				
	伊 1350頃		2907イオリノ/kg ⑦				1207イオリノ/ton ⑦	
	独 1500頃 (ハルギン)	45カールテン/ton ⑨	410カールテン/kg ⑧	32 カールテン/kg ⑧	120カールテン/ton ⑧			56カールテン/ton ⑧
	独 1516頃		290 Du/kg ⑤	32 Du/kg ⑤	90 Du/ton ⑤			
	蘭 1625頃		2カールテン/gr ⑥		1.20カールテン/kg ⑥			
	蘭 1700頃		2カールテン/gr ⑥		1.20カールテン/kg ⑥			
現在の国際価格	米 0.8 \$ /kg 小麦 0.3 \$ /kg 金・米比 60000 金・小麦170000	50 \$ /gr	1.0 \$ /gr 金・銀比 50	8.5 \$ /kg 金・銅比 6000	0.9 \$ /kg 金・鉄比 56000	20 \$ /kg 金・錫比 2500	2.0 \$ /kg 金・鉛比 25000	

ギリシャ・ローマ・ペルシア関係

- 吉村忠典『古代ローマ帝国』岩波書店(1997)によれば380万テティイ(2.5万ton)/295万テナリである。アウグストゥス統治下、アウレウス金貨はローマポンド(327gr)から40枚、デナリウス銀貨はローマポンドから84枚つくられていた。アウレウス金貨は25枚のデナリウス銀貨と等価。ケビン・グリーン『ローマ経済の考古学』(1999)のp. 106参照。キケロー『ウェッレス弾劾裁判(第3演説) 72』でも小麦1モティウス(6.55kg)3セルティウス(0.75テナリス銀、0.03アウレウス金)また、テナリス銀貨(3.9gr)が当初のアス銅貨(350gr)に対応して作られたものと考えられるならば、金銅比価は1000程度となる。
- ポンペイに残された記録によれば、小麦は12アス/モティウス(6.55kg)であった。16アスがテナリスであるから、0.115テナリス/kg。ネロ帝の頃、アウレウス金貨はローマポンド(327gr)から45枚、デナリウス銀貨はローマポンドから96枚つくられていた。アウレウス金貨は25枚のデナリウス銀貨と等価。ケビン・グリーン『ローマ経済の考古学』(1999)のp. 106参照。銅/銀=1000はギボンによる。
- ディオクレティアヌスの勅令として知られている公定の最高価格設定。小麦が1軍隊モディウス100デナリウス、金がローマポンドあたり72000デナリウス、銀がローマポンドあたり6000デナリウス、銅二級品がローマポンドあたり60デナリウスとある。軍隊モディウスは普通のモディウス(6.55kg)の1.5倍と見て10kgとする。ローマポンドは327gr。
- BC480頃、ペルシアの傭兵に支給した穀120,000モティムス(120,000×39.3kg)が600,000ドラクマ(銀600,000×4.3gr)ギリシャのアテネの例。T. Amemiya, Economy and Economics of Ancient Greece, Routledge, 2007 ドラクマは銀4.3gr, 金0.36gr。ピーター・ガンジィ『古代ギリシャ・ローマの飢饉と食糧供給』1998, p. 42 BC282-281のデロス神殿会計簿 小麦1モティムス(6×6.55kg)が4.5ドラクマ(4.3×4.5g)であった。
- ササン朝ペルシア後期。2008年「The Sasanian Era (The Idea of Iran)」の第9章「Prices and Drachms in the Late Sasanian Period」から□
(http://heartland.geocities.jp/zae06141/iranhistory_prices.html)。8kabizの小麦が1ドラクマ。Kabiz=little、ドラクマ=3.8gr銀、金銀比価=12で計算。

中国関係

- 主として宮崎市定氏の「史記貨殖伝物価考証」『アジア史論』の考証による。漢代の物価を記すほとんど唯一の史料である『史記』貨殖伝に、百万銭と等価な財貨として、穀物千鍾(鍾は10斛すなわち1000升で、容積200dm³、重量150kg)、漆器千枚、銅器千鈞(鈞は30斤、7.5kg)、鉄器千石(石は120斤、30kg)、馬二百匹、牛五百匹、丹沙千斤(250kg)、絹布・真綿・細麻布千鈞、棗栗三千石とある。これに基づいて計算した。
- 前漢時代、金一斤に付き、銭一萬文と言うのは極く標準的な換算関係であった。この例を踏まえて、『漢書』食貨志に出てくる王莽の幣制改革でも「黄金重一斤直銭萬。朱提銀八兩為一流直一千五百八十、它銀一流直千、是為銀貨二品」としている。銀には二種類あるが、它銀を採用する。なお『孫子算経』に「錦一疋価一萬八千、黄金一斤価十萬」とある。孫子算経は隋書や唐書に見える。内容的には漢代の度量衡を用いているところが見られ、書の性格上隋代以降の価格が示されている可能性が高い。隋代以降は漢代の三斤が一(大)斤であり、その単位系で読み替えた方が良いと思われる。本稿では採らない。
- 根本誠氏の「唐代の主要物資の価格について」『史観』65によれば、貞観の初め頃(627年頃)絹一疋米一斗(新唐書食貨志)、開元12年(724)穀斗五文(産地価格)米斗20文以下(兩京)絹一疋210文(通典七)、貞観3年(629)豊稔時、米斗3~4銭(貞観政要その他)、開元13年(725)東都米15銭(通鑑)、兩税のと

られた建中元年(780)米価200文で安定、建中初め(780)粟斗100文(李文公集九ほか)、開成五年(840)粟米斗30~50文、粳米斗70~90文であった。このように、唐代は物価変動が著しく、時期を特定しないと比較の意味がない。一方、唐代の金銀の価格に関する史料は極く少なく、開成年代頃に二例あるのみである。そのため、比較のためには開成の頃の物価を採り、粳米斗70~90文から、米1斗80銭を採用している。

- ④ 加藤繁氏の『唐宋時代における金銀の研究』によれば、宋代の書『因話録』巻三に一両銭八千文とある。開成年代の記事と考えられている。
- ⑤ 円仁の『大唐求法巡礼行記』東洋文庫に「開成三年(838)砂金大二両を市頭に於いて交易せしむ。市頭の秤定は一大両七銭にして、七銭は大二分半に准当し、価は九貫四百文なり」とある。東洋文庫の注記では、九貫四百文を大一両の価としているのが疑問である。これは一両二分半の代金とすべきであろう。その場合は大一両当たり5,785文になる。
- ⑥ 以下は主として宮沢知之氏の『宋代中国の国家と経済』による。『冊府元龜』の天宝十一年(752)に「每貫銭用を約するに、銅鐵錫の価七百五十文」とある。鑄銭用の原料費であり、銅鉛錫の平均価格であるが、安価な鉛と高価な錫を含むことから、平均的には銅の価格に近いと理解できる。銭一貫の実重は開元通宝なら計算上4キロ。ただし、この史料は開成年間とは年差があり、天宝末年から諸物価の暴騰があったので、直接の比較には注意が必要。開成年間により近い史料としては、貞元10年(794)に、銅禁を解くと同時に、銅器価格の最高値を強制的に毎斤160文に引下げた例がある。この場合の銅器価格は1000文/貫である。地金の銅価としては、750文/貫としても良いであろう。因みに、貞元19年と開成3年(838)の絹価はほぼ等価である。
- ⑦ 唐代の鉄価を示す史料はほとんどない。ただ大榑敦弘氏の「中国古代における鉄製農具の生産と流通」『東洋史研究』49に、7世紀初頭の高昌国で、鑿鉄1文/斤、調鉄4文/1斤5両との史料を紹介している。鑿鉄は鋤用で鑄鉄と思われ、調鉄は鍛鉄であろう。一方、7世紀初の米価は貞観3年(629)に豊作で3~4文/斗である。平年作の場合を5文/斗(5kg)として、米鉄比価を求めると、鑿鉄で1.5、調鉄で4.8である。
- ⑧ 以下も同じく宮沢知之氏の前出著書による。穀物、金銀価については、宮沢氏の要約「宋代の価格と市場」の市価の長期的変動を参考に要約した。また、銅価については、『宋会要』食貨三四の二五、坑冶雜録、崇寧元年(1102)に、膽銅が毎斤44文、あるいは50文、また煎銅(膽銅の一種)が80文とあることと、『宋会要』食貨三四の二五、坑冶雜録、乾道元年(1165)に、膽銅毎斤130文、黄銅220文とあり、通常の鋳銅が膽銅の1.7倍であることを参考に、平均価として斤100文とした。鉄価については、慶曆八年(1048)に、毎斤24~25文とあり、また熙寧七年(1074)に20文の例がある。

日本関係

- ① 角山幸洋「八世紀中葉の畿内における物価変動」『千里山論集』2による。天平勝宝三年(751)~天平宝字六年(762)の黒米の価格は1石500~600文であった。
- ② 天平勝宝四年(753)の「黄金貢輸令」によれば、多賀城以北の諸郡は調庸の代りに黄金を正丁4人当たり一両貢輸することになった。調の分だけで計算すると六丁で一両になる。丁の単価を仮に150文とすると、900文/両。また、天平宝字四年に発行された開基勝宝(金貨)は、その重量が11~15グラムであり、基準重量が一両(12.5gr)であったと考えられるが、これが和同開珎1000枚に相当していた。これを基にすれば、1000銭/両になる。一方『大日本古文書』16の天平宝字6年の「安都雄足啓案」に、減金小兩別准直150文とあるが、減金は金1に対して水銀5の割合の合金で、水銀が小兩8文であることから、金の価は860文/両と計算される。総合して考えると900文/両が妥当な価と考えられる。なお、村上英之助氏は、「八世紀における日本の鉄価と各種金属比価(再考)」『たたら研究』30のなかで、減金を金として取り扱っているが、種々の記録に照らし、減金は全て上述のアマルガム液の意に用いられているので、誤りと考える。
- ③ 竹内理三氏の『寧楽遺文』東京堂、1962、p781に収録された、天平宝字二年(758)の『観世音寺奴婢帳』によれば、「充直稻壹千二百束准銀三十兩」など、全て銀一兩を40束に対応させている。20束から一石の米が取れ、一石の米の価を550文とすれば、稻20束は450文程度である。したがって銀一兩900文になる。これとは別に、天平宝字4年(760)、金銭(開基勝宝;金3.1匁)1枚=銀銭(太平元宝;銀2.5匁)10枚の例から見ると、銀一兩が400銭に対応する。平均的に見て銀一兩650銭とする。
- ④ 『大日本古文書十六』東京大学出版、1982、p317に収録された『安都雄足啓案』正倉院文書に「熟銅六兩太准直五十六文」とある。ここから149文/斤が得られる。その他に、福山敏男氏の「奈良時代における興福寺西金堂の造営」『日本建築史の研究』によれば、天平六年(734)の生銅の価格が斤別36文と54文の二種がある。この場合の斤を村上英之助氏は小斤と考察している。大斤に換算すると108~162文/斤である。氏の論考「八世紀における日本の鉄価と各種金属比価(再考)」『たたら研究』30による。また、『寧楽遺文』p.478の「造法華寺金堂所解」に銀1兩80文、銅1斤50文、錫1斤160文、水銀1兩6文、白米1石500文とある。金属価は村上氏のいうように、いずれも小称と考えられる。銀価が低い理由が分からない。
- ⑤ 同上の村上英之助氏の考察結果(32文/斤)を参考にした。ただし養老令では、賦役令の場合鉄3口と鉄1挺が等価、禄令の場合鉄5口と鉄2挺が等価と、ふたつの基準がある。鉄の市価を45文として鉄は33.75~40.5文になる。35文/斤を採用する。
- ⑥ 『延喜式』では、主計上の調の項と禄物価法の項で、相対物価について触れている。まず主計上では、諸国の調を丁当たり、銀の場合一分、鉄の場合二挺(挺は三斤五兩)としている。この事から、銀、鉄の相対価格が判るが、便宜のため、一丁150文で換算する。次に禄物価法では、各物資の価格を直稻の束で表示しているが、畿内の場合、鉄は一挺(三斤五兩)五束である。また備中、長門、豊前等が貢納する銅鉛は、斤別三束九把六分五毛七厘である。銅と鉛を込みにしての価であるが、銅のみを採れば斤別五束と見ることが出来る。金については触れていないが、おそらく黄金貢輸令の場合と同様と考えられる。稻20束を仮に450銭と

して換算する。

- ⑦ 小葉田淳氏の『金銀貿易史』からの孫引きであるが、仁平2年（1152）に行われた鳥羽法皇の50歳の宝算に際して、国司調進物および可進納行事所見色物の価値を記して、銀両別12疋、熟銅斤別8疋、鉄4疋で1疋、能米1石別10疋とある。建久4年（1193）の宣旨で1000文1石としており、実際の米の売買価格も同程度であるので、疋を100文として計算した。ただし、鉄については、重量単位の疋が良く分らない。『延喜式』に出てくる挺であれば、とても考えられないほど安価になってしまう。ここで思いあたるのは、村上英之助氏の論考「鉄挺の遠近」『考古学研究』40-4である。氏は、鉄1挺は小斤で10斤であるが、もともとは小1斤すなわち222グラム程度の鉄挺10枚の集合を1枚の大形鉄挺で代表させたと考察している。事実、古墳から出土する鉄挺は大部分が、この小斤の値に近い。また中国の唐代遺跡の何家村から出土した銀板60枚の形状が鉄挺そっくりであり、重量が5両（209グラム）であることもその推論の根拠になる。しかし、「鉄4疋で1疋」は鉄4疋で10疋（1挺2.5疋）の誤記の可能性が高い。それは同時期の別史料、久寿2年（1155）の石山寺丈六仏支度に「1挺2疋」とあるからである。誤記説によって示す。なお当時の金銀比価は、応徳2年（1089）に5倍であった
- ⑧ 上と同じく小葉田淳氏の『金銀貿易史の研究』からの孫引きであるが、永仁6年（1298）の『御即位用途記』に、銀両別100疋、銅斤別56疋、米石別107疋、砂金両別300疋とある。鎌倉時代の疋は10文を意味している。銀と金の単位である両が、小両（12.5g）か京目（金4匁5分、銀4匁3分）かが問題であるが、金は小両、銀は京目（15g）とする。また、『鎌倉遺文』1263年の筑後鷹尾社宝殿記事に「鉄5束但12費用途5石」、1285年の筑後瀬高下莊鎮守宝殿記事に「鉄1束800文」とあることから、鉄1束が米1石で800文と判る。ただし、米1石は1000文として評価する。
- ⑨ 宮本又郎氏などの『歴史の中の物価』に紹介された各種史料から、おおよその傾向を纏めた。この頃、米の単位の石は、かなり現在の重量に近付いているが、良く分っていないので、暫定的に130キロとしておいた。
- ⑩ 興福寺門跡大乘院尋尊の『大乘寺社雑事記』の文明12年（1480）の条に、「備前、備中で一駄十貫文の銅を仕入れ云々」とある。一駄は30～36貫。
- ⑪ 日本銀行金融研究局『貨幣年表』1981に収録された米相場、金・銀・銭相場の他に、岩波全書『地方史研究必携』などを参照し、金貨、銀貨の量目や純分は、対象時期に主に流通していたと思われる通貨の価によった。
- ⑫ 『長崎市史』通交貿易編によれば、明暦年間（1655～58）の国内の銅相場が銀114匁/100斤。また小葉田淳氏の『日本銅鋳業史』では、延宝元年（1673）足尾丁銅10万貫を金1万両で払下げを受けて、棹銅に吹き長崎に運ぶと3000両の赤字であったと言う。すなわち1.3両/10貫（125匁/100斤）が原価であった。その他、田代和生氏の『近世日朝通交貿易史』によれば、貞享元年（1684）から宝永7年（1710）の朝鮮への輸出価格平均が吹銅で210匁/100斤であったが、対馬藩の仕入れ価は114匁であった。本稿では、市場価格を想定しているので、次項の買上げ価格と売下げ価格の差を考慮して、120匁/100斤とした。
- ⑬ 『加計町史』による。元禄13年（1700）の価格は銀28.4匁/10貫、元禄14年（1701）の価格は33.6匁/10貫であった。ただし、元禄14年は物価高騰の年なので、元禄13年の史料を採用する。ただ、これは卸値であるから、消費地の価格は、35匁/10貫程度になる。
- ⑭ 小葉田淳氏の『日本銅鋳業史の研究』に、生野銅の明和3年（1766）の吹銅価格を銅100斤につき買上げ価格を148匁、売下げ価格を223匁としている。
- ⑮ 岡田廣吉氏編『たたらから近代製鉄へ』平凡社の表による。大阪表積み入れ値段。
- ⑯ 宮本又次氏の『近世大阪の物価と利子』創文社による。天保元年（1830）の丁銅の価格で、320匁/100斤。また鉄の価格は62匁/2束（24キロ）
- ⑰ 『平安遺文』古文書編第4巻に、法勝寺新堂の費用として、応徳2年（1085年）の金、銀、錫、水銀、熟銅、荒銅の価格を直絹で、25疋/両、5疋/両、8疋/斤、3.2疋/斤、2疋/斤、1.6疋/斤と示している。銀の両の重量は金の価格から見て小両とする。鉄について、0.05疋/疋とあるが、この場合の疋は釘（3寸釘）基準（1挺から40疋）の疋と考えられ、鉄なら2疋/挺である。
- ⑱ 『歴史のなかの物価』同文館出版（1985）の第2章で、岩崎勝氏が「江戸前期（17世紀）の米価動向と経済」のなかで、広島のみ米価の変動を1620年から1860年にわたって、グラフなどで紹介している。1620～1630年頃、20匁/石である。原典は岩崎勝『近世日本物価史の研究』p. 410
- ⑲ 『大日本資料第十二編之十七』、慶長十九年雑載、平戸戸ツガ商館文書。大阪の陣のため、鉛が高いと云っている。
- ⑳ 『大阪商業史資料』第13巻の正徳四年（1714）の項。鉄の他に、鋸らしいものとして0.94両/100斤もある。米価異常年なので、米価、両、匁、銭の関係は1712年。
- ㉑ 岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』1997、p. 19
- ㉒ Donald B. Wagner, The traditional Chinese iron industry and its modern fate, <http://staff.hum.ku.dk/dbwagner/Fate/Fate.html>
江戸後期（1784～1855）のみ米価、鉄価資料については、畠山次郎「鉄価格の推移に見る中国山地砂鉄たたら体制の破綻」『製鉄史論文集』2000、p. 334がある。この資料を基にして、筆者が再編した表を表2Bに載せる。

** 日本の現代関係資料については、豊富に資料があるので、出典を示さない。国際関係も同様。

欧州関係（英国関係は表2Aを参照のこと）

- ① J.E.Thorold RogersのAgriculture and Prices in England (Oxford university Press)、Vol. IからVol. Vに記載された内容。
- ② トーマス・トゥック、藤塚知義氏訳『物価論』の付表11の資料による。

- ③ アダム・スミス、大河内一男氏監訳『国富論』中央公論社の第十一章余論』には、1202年から1764年までの小麦クォーターあたりの価格が整理されている。
- ④ 竹岡敬温『近代フランス物価史序説』創文社、第6章「パリの穀物価格」
- ⑤ 諸田実氏の『フッガー家の時代』有斐閣(1998)によると、1516年のヴェネツィアの取引引きでは、銅を7,368ツェントナー(370ton)を31,747トッカート(86トッカート/ton)、銀を15,850マルク(3,883kg)を122,898トッカート(32トッカート/kg)で販売している。また銅について、1519年キタル当たり28シリング(93トッカート/ton)、1542年、293ツェントナーを761トッカート(52トッカート/ton)で販売した。
- ⑥ 1624年、アムステルダムにおけるスウェーデン銅(64.55fl/100ponds)、日本銅(56fl/100ponds)、fl=金0.73g=銀11g。銅/金=950。銀/銅=63
以下、アムステルダムにおける日本銅、1651年(37fl/100ponds)、1700年(62.47fl/100ponds)、銀銅比=110、66
- ⑦ イリス・オリーゴ、篠田綾子訳『ブラートの商人、中世イタリアの日常生活』白水社、p.39
- ⑧ 瀬原義生「中世末期・近世初頭のドイツ鉱山業と領邦国家」1499年頃銀はマルク当たり7-8グレンでであった。また16世紀初頭の鉛がツェントナー当たり45/16グレンであった。1498年頃、銅のヴェネツィア価格はツェントナー当たり6グレンであった。銅は120グレン/ton、銀は32グレン/kg、鉛は56グレン/ton、金は0.41グレン/grになる。
- ⑨ また奥西孝至「15世紀末期ヘントにおける穀物市場と市場価格」『国民経済雑誌』168-3によれば、ベルギーのヘントにおける1495～1505年の小麦は23グロート/ハルステルであった。グロートは銀3.0grで0.1グレン相当、ハルステルは53リットルで43kg。

朝鮮関係

- ① 『世宗実録』45巻、世宗11年9月丙寅 西暦1428年の公示価
銅1斤(0.60kg)が米3.5斗(35×0.6リットル×0.8=16.8kg) 米銅比価=28 銅金比価=680
- ② 『世宗実録』29巻、世宗7年9月戊戌 西暦1424年の諸道水鉄匠税額表
大炉冶 中炉冶
米6石8斗 米6石2斗
税鉄90斤 税鉄80斤
100斤=60kg 6石8斗=680×0.6リットル×0.8=326kg 米鉄比価=5.4 金鉄比価=3500
- ③ 『世宗実録』78巻、世宗19年8月己未 西暦1436年
正布3疋=十品金1銭=九品銀1両
金1銭=3.75gr 銀0.9両=33.8gr 金銀比価=9 銀銅比価=75
世宗19年3月19日の租正布1疋=米5斗
米15斗=150×0.6×0.8=72kg 金3.75gr 銀33.8gr 米金比価=19000